

日本語教育における一人称主語の扱いについて

富田隆行

はじめに

日本語においては主部（主語）に立つ一人称代名詞、特に「——は」の形が陳述されずに発話（表現）がなされる場合が多い。

この点について本学教授夜久正雄先生は、「日本語と英米語とネパール語との比較ノート——主として語順および一人称主語について——」（アジア研究所紀要第三号、一九七六年二月・亜細亜大学アジア研究所発行）の中で次のように述べておられる。

「海を見る。」

というセンテンスは、この文を話した人、または書いた人が、「見る」の主語なのである。文の書き手や話し手自身が主語となる場合には、その一人称主語をあらわさないのが、日本語の特質である。

「私は海を見る。」

と言う場合は、他と区別して自分を前面に押し出してゆく場合のことばづかいなのである。(それで「は」は副助詞とか係助詞とかいう、格助詞とは言わない。)

そして、柿本人麿、明治天皇、今上天皇の短歌を、その英訳との比較対照の後に、「ともかく、英米語では、文は主語と述語から成る」という原則があるが、それは日本語にはあてはまらない。特に、一人称主語は日本語では示さないのが原則である。」と明示されている。

そこで本稿では、驥尾に付して、外国人に対して日本語を教えている者の立場から、このテーマについて日ごろ書きとめておいたことなどをまとめてみることにした。

一 待遇表現としての一人称代名詞と二人称代名詞の対応

現代口語において通常使用される一人称代名詞と二人称代名詞との対応で挙げてみると次のようになる。

	一人称代名詞	二人称代名詞
日本語	わたし(わたくし) ぼく	あなた きみ
中国語	我 おれ	你(您) おまえ

英語 I you

マレー語 * 1 saya anda/kanmu

* 2 aku engkaw/awak

(* 1 わたし—あなたの対応 * 2 ぼく—きみの対応)

日本語では通常一人称主語は示さないにもかかわらず、右の表から類推するに、主語となり得る一人称代名詞およびそれと対応した二人称代名詞は、他の言語に比べて、決して少ないほうではない。これはいかなる理由によるものであろうか。

慶応義塾大学教授鈴木孝夫氏は、この点について、著書『ことばと文化』（岩波新書）の中で、佐久間鼎博士の研究に拠るとして、次のようにまとめている。

「日本語の一人称代名詞および二人称代名詞は、もとは何か具体的な意味を持っていた実質詞からの転用であり、一人称代名詞はどれも新しく使用され始めた時は、自分を卑下する意味内容を持っているが、長く使用されるにつれて、段々と自分が相手に対して尊大にかまえる気分を表すようになり、遂には相手を見くだす時にだけ使えることばに変化し、一般の使用から脱落していく。二人称代名詞においては、一人称代名詞とは正反対に、元来は相手をうやまい敬する良いことばであったのが、それが使われるにつれて、相手を低く見ることばとなり、ついには相手を罵り、いやしめる悪いことばか、極めて親しい交友関係にのみ許される、ぞんざいなものになり下ってしまった。」（『ことばと文化』より要旨抄出）

そして、鈴木氏は「インド・ヨーロッパ語たとえばラテン語の《ego》や《tu》、英語の《I》や《you》などが、ど

こまで起源を尋ねても、始めから、話し手及び話し相手を意味する専用のことばであるのとは大違いである。」としている。

それでは、日本語の人称代名詞は、なぜ、他の実質詞から転用されたり、またそれが、どんな要因でこのような変遷をたどるのであろうか。

「ことば」は、そのことばを用いる民族の思考方法を表現するものであり、心情構造の現れでもある。したがって、その答えは日本人の心情に求められなければならないまい。

この点について、夜久先生は、冒頭に引用した論文の中で、次のように説明しておられる。

「一人称主語を使わないことは、日本語だけではなく、韓国語、モンゴル語、チベット語、ネパール語、ヒンディ語に共通する性質である。おそらく、膠着語と言われる言語に共通な現象ではあるまいか。その代り、これらの言語には、敬語表現が発達していて、これによって、主格を示すことができる。(中略) 欧米系の国語では、いつでも一人称主語を意識して前面に立てる、——心理的に言うと、いつでも自己主張の態度を崩さないということになる。これに対して、日本人は、自己主張、自我意識をワガママとして、抑制する。(中略) 『おれが！ おれが！』と言って、人をリードしようとする態度は、日本人の心情にそぐわないのである。」と。

私は、この夜久先生の論を次のように理解する。

「自己主張、自我意識をワガママとして抑制する日本人の心情」は、相手をどう遇するかということが思考の拠点となる。すなわち、相手に対する敬意が常に働くわけで、それが、尊敬語、あるいは謙遜語という表現形態を通して表出されるわけである。「お前」「貴様」がこの尊敬意識から生じ、「僕」が謙遜意識から出てきたことばであること

は先学の指摘するところであり、すべて待遇意識に因るものと判断される。現在でも鹿児島県の一部においては、「おまんざあ」（御前様）ということばが二人称尊敬代名詞として使われている。

しかるに、一人称主語を立てることは、それがたとえ自分を卑下したことばであっても、どうしても、「日本人の心情からして、『おれが！ おれが！』と言って、他人をリードしようとする態度」につながり、「おまえが（は）」と言うことは、それと対応した「おれが（は）」という意識の表出になる。かつて、今泉忠義博士から講義の折に、「近ごろの学生は教師の前で『ぼく』ということばを平気で使うが、自分（今泉博士）のことを『きみ』と呼ばれているようで、いい気がしない。」という旨の話を伺ったことがあるが、今泉博士の言語感覚では常にこの待遇意識が働いていたのであろう。

ここで次に、それでは日本人は、現実には、どんなことばで自己あるいは相手を言い表すのかということが問題になってくるわけであるが、この点については鈴木孝夫氏が前掲書『ことばと文化』の中で、詳しく解説している。

最後に、本章の結びとして短歌における一人称主語について触れることにしたい。

短歌における一人称主語についても、冒頭の夜久先生の論文中に述べられている「一首一文を原則とする短歌において一人称主語をあらわさないことは、その詠み手が主語であることが明白であるからである。」という趣旨の論に尽きると思われるが、私は日ごろから次のようなことを考えている。

短歌において一人称主語を立てないことは、一つには、それをどのような人が読む（見る）かがはっきりとしていない、すなわち、待遇する相手が漠然としているところから、一人称主語に立てることばが選びにくいということがあるのではないかということである。また、一方においては「対立者を意識した表現、思考ではなくて、同じような心

情をもつ集団内において、他の人たちの気持を代弁する立場においての発想が日本語の特色である（外山茲比古著『日本語の論理』）。とすれば、かえって一人称主語を立てないほうが歌の心に適っているのではないかと感ずるのである。

一人称主語が立っていないということは、その歌を読む者（見る者）が自由にそこに入り込み、自分の感情として受けとめることができるという文学的効果を備えていることになる。「万葉集」以来の短歌が時代や生活環境は変わっても、常に身近なものとして受け入れられている要因の一つがここにあるのではないかと判断する。

（本章の一人称代名詞と二人称代名詞の対応については、張世国教授の御指導をいただき、また、マレー語についてはマレーシア留学生 *God Mya Li* 君の協力を得ました。感謝申し上げます。）

二 日本語教育における一人称主語の扱い

外国人のための日本語入門書を開いてみると、二人称主語「あなたは」と一人称主語「わたしは」の対応した会話が多くのことに気がつく。一見して不自然な日本語と映らなくもない。しかし、よく調べてみると、一概にそうとも言えない提出の仕方がされている。例えば、鈴木忍著『日本語Ⅰ』（東京外国語大学附属日本語学校発行）における初出の仕方は、第二課において「わたしは田中です。」「わたしは日本人です。」「わたしは先生です。」となっているが、これはその後、引き続き、「わたしは」に対応して「この人・その人・あの人」、「田中」に対応して「ケリーさん・サリーさん」という学生の名前、「日本人」に対応して「アメリカ人・タイ人」、「先生」に対応して「学生」という表現が提出されており、これらの語との対応の上で、「わたしは……です」という表現が提出されているのである。

また、その次に一人称主語および二人称主語が現れるのは第六課であるが、ここでは、果物屋、文房具屋における買物の場面を提示した後に、その二人の人物を対照させて、その一人一人との問答を「あなたは果物屋で何を買いましたか。」「わたしは果物屋でりんごを買いました。」「あなたは文房具屋で何を買いましたか。」「わたしは文房具屋で紙とノートと鉛筆を買いました。」という形で提出しており、いずれも「あなた」なる人、「わたし」なる人を取り出して言う状況がきちんと設定されているのである。(引用原文は仮名表記、分かつ書き)また、引用書のその他の課ならびに他の多くの教科書においても、特に「直接教授法」による教材である場合には、おおむね、教室内における教師対学生の対話という場面を想定して書かれているため、教師が学生の一人一人に対して「あなたは」「あなたは」と順に尋ねていき、学生も一人ずつ「わたしは」「わたしは」と答える会話形式になっているのである。

しかし、通常の会話場面においては、多数の人を眼前にして、端から「あなたは」「あなたは」と尋ねていくような場面はほとんどないわけであり、一対一の会話が多く、その場合には話し手と聞き手が互に、はつきり、相手を認識しているわけであるから、質問文における二人称主語ならびに回答文における一人称主語は現れてこないわけである。そんなところから、日本語教科書におけるこれらの語の提示・使用が、日本語としてはなじまない。翻訳語的な違和感を生じさせているのであろう。

しかし、日本語教育においては、この一人称主語が非常に大事な役割を果たしているのである。

学習者の母国語は使わず、日本語によって日本語を教える、いわゆる「直接教授法」によって指導をする場合、学習以前に教師と学生の意思の疎通をはかる唯一のことばは名前である。教師は第一回目の授業において、まず、出席をとって学生自身に自分の名前を認識させる。そして、それが一通り終わったところで、例えば、「トミタ」「トミ

タ」と言って、それが教師の名前であることを暗黙のうちに理解させ、「わたしはトミタです。」と言って自己紹介をする場面を作る。そして次に、「○○さん」「○○さん」と、順々、指示をして、学生の口から「わたしは○○です。」と言わせていく。ここで初めて、教師と学生の間「わたしは——です。」という共通の日本語が生まれるわけである。それから、順次、名前を「男・女・先生・学生」など身近で分かりやすい語に言い換え、「わたし」を「あなた」に、「——です」を「——ではありません」に展開させて、語彙・文型の拡大をはかり、通常の初級教科書が到達目標としている「受身」「使役」「尊敬・謙遜」の表現習得にまで指導が重ねられていくわけである。そして、その過程においても、日本語における種々の表現を導入していく上で、この一人称主語を立てることが必要となってくるのである。その主たるものに次のようなものがある。

- ① 敬称の使い方。日本語では「わたし」には付けず、「あなた」や第三者にのみ付けるということ。
- ② 推量の表現「……でしょう」の導入。「わたしは……です／ます」「あの人は……でしょう」の対応において導入。英語国民はこの「でしょう」を“shall”と理解し、「わたしは行くでしょう。」というような文を作りがちである。
- ③ 願望の表現「欲しい」「欲しがる」「たい」「たがる」の使い分け。(例)「わたしはカメラが欲しいです。」——「あの人はカメラを欲しがっています。」などの対応において導入。
- ④ 受給の表現「あげる・くれる・もらう」の導入。「わたしは……もらう」の形を立てないと、この使い分けが定着しない。
- ⑤ 自動詞と他動詞の使い分け。(例)「わたしは窓を開きました。」——「風で窓が開きました。」などの対応により導入。
- ⑥ 受身の表現の導入。日本語本来の受身は有情のものが主語であり、「迷惑の受身」に代表される。したがって、

主語は一人称である場合が多く、日本人の言語感覚からすれば、ことさら主語を立てることもないものであるが、そうした受身の用法、感覚を習得させるためにも、まず、一人称主語をはっきりと示して導入、練習させることが必要である。そうしないと、「わたしのお金は盗まれました。」というような言い方が必ず出てくる。

⑦ 敬語の導入。これも受身と同様に、日本人にとっては、敬語があるから主語は言わなくても分かるものであるが、敬語の用法を理解させるためには、逆に主語がその足がかりとなる。

その他の場合においても、教室内という限られた場所において種々の会話場面を作っていく上で、一人称主語ならびに二人称主語は大きな要素となっているのである。

しかし、外国人に対する日本語教育だからといって、前章でまとめたような日本語の原則を無視し、教師は常に「あなたは」「わたしは」と言う練習を学生に課しているわけではない。指導する表現の習得が確認された後には、応用会話や練習書などにおいて、その場面に即した、主語を言わない形の会話にも慣れさせるような指導法をとっているわけである。この一人称主語の問題に限らず、助詞の省略などについても、日本人は言おうとすれば言えるわけであり、お互にそれを心得た上で会話がなされているのであるが、外国語として初めて日本語を学ぶ者に対しては、この基礎づくりをしっかり行っておかないと、それがそのまま文章を書く場合にも現れてくるという結果になるのである。

おわりに

学習者から、よく、「日本語は難しい」と言われる。私も外国人にとって、日本語は難しいであろうと思うし、ま

た、教える側にとっても難しい言語であると常に感じている。

しかし、学習者が「難しい」と言うのは、「助詞が難しい」とか「漢字が難しい」とかいうことであり、そうした「文法」「表記」または「音声」上の難しさは、どの言語を学ぶにしても、学習者の母国語との異同の上で、必ず一点はあるものである。こうしたことを「難しい」と嘆くのであれば、外国語は学ばないほうがいい。しかるに、私が教授上「難しい」と感じていることは、本稿に関して言うならば「日本語は一人称主語を言わないことが原則であるが、他と区別して自分を前面に押し出す場合には言う」という日本人がほとんど無意識のうちに行っているこの使い分けを学習者にどうしたら修得させることができるかということである。すなわち、ある表現がなされる背後にある日本人の心情をいかに文化を異にする外国人に体得させるかということである。

国立国語研究所長の野元菊雄氏は、国際化社会における外国語としての日本語について、「自然の言語としての日本語には、わたしはほしほしいままな変更は加えるべきではなく、自然の変化に任せておいていいと思います。もっとはっきり言えば、自然の変化に任せるべきでしょう。しかし、外国語としての日本語は、自然に習得する母語としての日本語とは違ってもいいと思うのです。」(『日本人と日本語』筑摩書房刊)との考えのもとに、世界共通語としての『簡約日本語』の創出」を提唱しているが、この「簡約日本語」には、一人称主語としての「わたし」、二人称主語としての「あなた」を採り入れ、「簡約日本語」での範囲においては、これらのことばが抵抗なく広く使用されるような共通の理解を得てほしいものだと感ずる次第である。